ネットワーク資料保存 第119号 2019年2月
日本図書館協会
資料保存委員会

東日本大震災と原発事故から再開館までの歩み
～富岡町図書館の資料の保存を中心に～

星　紀子

2011年3月11日に発生した東日本大震災。それに伴う福島第一原発事故により翌日の3月12日には富岡町は全町避難の指示を受け、図書館は休館を余儀なくされる。約7年間の休館後、2018年4月1日再開館を果たす。再開館までの作業期間は2017年6月から2018年3月までのわずか10カ月間。他の東北の被災地と明らかな違いは原子力災害による被災地であるという事。そんな特殊な事情の中での再開準備だった。

富岡町図書館が入る「学びの森」は複合施設で、震災による建物への大きな損壊はなかったが、一部の天井が落下したことと、屋上雨水タンクの配管から水が館内に漏れてしまう被害があった。そんな状態のまま、約6年間の避難。停電のため空調も無く（屋内なので雨風にさらされることはなかったが）館内は夏の猛暑と冬の寒さを受け続けた。時間が止まったままのようでありながら、カビや虫の繁殖は確実にすすみ、小動物の痕跡もあり、それによって本の劣化はすすんでいたと思われる。

2017年6月1日、作業初日に館内の空間放射線量を測定した。全30カ所、0.04～0.28μSv/h。測定器を本に近付けても針の触れはなく本への汚染がない事を確認した。開館までの10カ月間内に3回測定し記録は館内掲示した。

◆資料の選別作業

震災時の落下による破損、カビ、虫の付着の状態を一冊ずつ確認して選別していった。できるだけ廃棄は避けて残したいが、保管する書庫は狭くスペースがない上、一時保管する置き場所も確保できなかった。「残す」か「捨てる」の二者択一だったため、残して保存することより、「利用できる本か？」という事を優先して考えた。曖昧ではあるがこれが判断基準となった。

残す本は、表紙・裏表紙、天、地、見返しの埃を綿手袋を着けて拭き取った。天の埃は刷毛や歯ブラシを使い払い落とした。特に児童書については放射線への不安から、長期間

CONTENTS

東日本大震災と原発事故から再開館までの歩み～富岡町図書館の資料の保存を中心に～
・・・・・・・・・・・・・・・・・・星　紀子　1
<参加報告>IFLA（国際図書館連盟）クアラルンプール大会・・・・・・・・・・佐藤　従子　3
<参加報告>国立国会図書館主催第29回保存フォーラム『図書館建築と資料保存』
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小林　彩　4
<参加報告>第104回全国図書館大会　第12分科会　資料保存
「どうする!? 音声・映像資料の保存」・・・・・・・・・・・・・・・・・楯石　もも子　5
第104回全国図書館大会　第12分科会　資料保存
「どうする!? 音声・映像資料の保存」アンケート結果・・・・・・・・・・・・・・・　6
委員会の動き・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

放置されていた本を利用することへ過敏に反応する声もあり、固く絞った雑巾で念入りに拭き取ったが、それでも捉え方は様々で、私自身そういった声に敏感にならざるを得なかった。

カビの特徴としては、水漏れがあった近くでは湿気のためか黒いカビが多く発生し、ベストセラーなど多く利用されただろう本には、手あかや皮脂が栄養となったためか緑カビが広がっているものが多かった。

虫については、大きさ１㎜程度、淡褐色で、あくまで推定ではあるがチャタテムシの一種ではないか。その生態は不明だが、富岡町図書館では館内全体の中でも特に､窓際の書架の上段、そして白っぽい本に発生している割合が高く、ブックコートの内側に無数に張り付いていた。チャタテムシは「書物ののりや穀粉、動植物の乾物などを食べている」(『世界大百科事典』平凡社／2014）ことから、ブックコートの粘着部分を餌にしていたかもしれない。特に害はないようだが、全体的に付着している本は捨てる方へ選別し、比較的少なく１カ所に集中しているものは、部分的にブックコートごと切り取って除去し本を残した。この他には、天や小口に茶色い染みが見られた。これは紫外線による焼けとは明らかに違っていて、斑点状になっているものが多かった。

紙芝居は水漏れがあった場所の近くに配架されていたために一面に黒カビが発生しているものが多く、ビニールケースに入れたままの保管が、結露を促し湿気を閉じ込めてカビを一層繁殖させたとも考えられる。紙芝居の長期保管はビニールケースから出しておいた方が通気性も良く安全ではないかと思った。

（紙芝居の黒カビ）

視聴覚資料については、CD、DVD は白濁化しているものが多くあり、専用のクリーナーで一枚ずつ拭き取った。

VHS テープは、ほとんどに白カビが発生していた。震災以前の富岡町を記録したテープは、ビニール袋に密閉して一旦保管し DVD へ媒体変換後に廃棄することにした。他は全て廃棄。

◆燻蒸の実施

カビや虫については、目に見えるものは可能な限り排除したが、館内全体で発生していたカビは周辺一帯に拡散しているに違いない。虫についても、見えない部分に卵を産み付けていると思われる。そこで、開館後も引き続き利用する資料については、繁殖を食い止め、少しでも不安を取り除くために、専門業者に委託し燻蒸処理を実施した。(燻蒸とは「生物的要因による損傷や劣化といった被害から防除するために用いる手法。」『博物館学事典』雄山閣／2011）

書架４本を通路も含めて１ブロックとして、２ブロック分に館内の資料を運び込み集中させた。通路にも段ボール箱詰めした本を積み上げ、資料以外の布張りの閲覧用ソファーや椅子、事務用品やお話会用の小道具まで、スペースが許す限り入れ込んだ。そこをビニールでしっかり密閉して、ガスエキヒューム S を 48 時間注入する。その後時間をかけてガスを活性炭に吸着させながら排気し、残留ガスを測定して安全を確認後に引き渡しを受けた。当初は書庫の資料も運び出して所蔵資料全てを燻蒸する予定だったが、スペースと時間が足りず断念した。

（燻蒸の様子・左側のホースで排気）

◆再開館に向けて

配置と配分の見直しをして配架作業をすすめながら、約７年間もの空白を補充するため、急ピッチで新たな資料の選定、発注、受入れに取りかかる。館内のクリーニングを行い環境を整えて一気に再開館へと向かった。

作業開始した時と比べると、書架に並ぶ本は何度も何度も人の手に触れていくことにより、どんどん生き返ってくるようだった。そして館内は「図書館」としての息吹きが感じられるようになってきた。

◆再開館と今後への課題

富岡町図書館は、館内にお茶を飲みながら交流できる「くつろぎスペース」を設けた。図書

館に来て出会った人同士でおしゃべりをしたり、図書館主催のミニ教室の会場に使ったり、賑やかな声がする場も提供する。また、東日本大震災関連資料を集めて郷土資料コーナーを拡充。その記録は今後も収集して後世へつなぐ役割も担う。

町民の身近な存在になれるよう、小さな取組みも始めた。復興住宅へ本を積んだ移動図書館車を走らせ、町の図書館の雰囲気と町の様子も一緒にお届けしている。

2018 年 4 月の再開館から少しずつではあるが着実に利用は増えている。まだまだ課題は多くあるが、全町避難を経験した町の図書館として、町の復興の下支えとなる可能性は未知数だ。

（開館後訪れた子どもたち）

全国で災害が多発している今、被災地図書館の経験が何らかの教訓となって欲しいと思う。

原発事故によって地域に人々が自由に立ち入れなくなった状況下で、警戒区域内の資料館では学芸員同士がつながり、文化財の保全に奔走し、放射線量が少ない地域へ文化財の搬出を行った事例がある。図書館資料についても、悪条件下に長期間放置されたままではなく、貴重な郷土資料等はレスキューするネットワークの構築と保管施設の確保ができることを願う。

（ほし　のりこ／富岡町図書館・
東京レコードマネジメント（株））

＊編集部注

この原稿は 2018 年 11 月 12 日に日本図書館協会研修室で行われた、資料保存セミナーでお話しいただいたものをもとにお書きいただいたものです。

＜参加報告＞

IFLA（国際図書館連盟）
クアラルンプール大会

佐藤　従子

2018 年 8 月にマレーシア・クアラルンプールで開催された世界図書館・情報会議：IFLA 第 84 回年次大会に参加の機会を得たので、資料保存関係の会議・発表についてご報告する。

１．ビジネス・ミーティング

年次大会期間中には、IFLA の活動を担っている執行部の理事会や部会、現在 40 ほどある分科会の常任委員会等が、それぞれ会議を開き、現在進めているプロジェクトや今後の活動について協議する。最近はメール以外に職場や自宅の PC で参加できるウェブ会議が活用されるようになっているが、直接顔を合わせる年次大会での会議があってこそ日頃のコミュニケーションがスムーズに運ぶ。筆者は、PAC アジア地域センター[(1)]長及び資料保存分科会常任委員として 4 つのビジネス・ミーティングに参加した。

資料保存分科会常任委員会は期間中に 2 回開かれた。今回は、ヨーロッパの委員の参加が少なかったが、委員でなくても活動に関心のある大会参加者はオブザーバー参加できるので、実際には 30～40 人ほどの会議になった。IFLA で進めている”Global Vision”[(2)] の実現のため資料保存関係でどんな行動が考えられるかや、今後のプロジェクトとして、保存関係の標準・ガイドラインの改訂、IFLA の機関誌 *IFLA Journal* で保存特集号を刊行する案、来年の年次大会のセッションのアイディア、などが話し合われた。

一方、PAC（資料保存戦略プログラム）[(3)] は現在世界 16 か国に地域センターを設置しているが、今回の会議には 5 つのセンター（カタール、オーストラリア、ポーランド、米国、日本の国立図書館）の代表と IFLA 本部の担当者が出席した。各センターが短く活動報告をした後、今後の活動の進め方について意見交換を行った。地域センターは、2015 年の国際センター業務の IFLA 本部への移行[(4)] 後に 4 つ増えて、PAC ネットワーク全体でカバーする地域と専門領域は広がったが、各センターの活動は PAC ネットワーク外にはあまり知られておらず、センター間の情報交換や交流も活発とは言えない。PAC ネットワークの活動の見える化が課題と言える。

また、今大会で初めて資料保存分科会と PAC の合同ミーティングが開かれ、分科会と PAC の役割や性格の違いを踏まえながら、協力関係を強化して共に資料保存活動を促進していくことを確認した。前述のガイドラインの改訂等も両者が連携して取り組むことになる。

資料保存分科会常任委員会ミーティング

２．オープンセッション

今大会では PAC 主催セッション 1 つと、資料保存分科会主催セッションが 2 つ開かれた。

PAC は貴重書・特別コレクション分科会と共催で、「パームリーフ・マニュスクリプトの保存とメタデータ記録」をテーマとしたセッション、資料保存分科会は、情報技術分科会と共催のデジタル保存計画についてのセッションと、ニュースメディア分科会と共催の新聞の保存についてのセッションを開催し、公募で選ばれたペーパーが発表された。マレーシア開催のため、地元マレーシアやインドネシアなど東南アジアからの発表が目立った。高温多湿の気候や施設・設備の制約がある中、その地域に合った現物保存や媒体変換の工夫と苦労がうかがえた。

一方で、国際的な資料保存の分野で「デジタル保存」は主要テーマの 1 つになっている。デジタルをテーマとしたセッションは参加者も多い。発表内容は、自館のデジタル化プロジェクトから最新の技術動向まで幅広く、「資料保存」で扱われるテーマのすそ野が広がっていることを実感した。

大会終了後も来年のアテネ大会を目指してセッション企画の具体化や PAC センターを広報する資料の刊行などについて、PAC 内、常任委員会内で検討が進められている。今後も IFLA を舞台にした資料保存の国際協力活動に関心を寄せていただき、機会があれば年次大会にもご参加いただければ幸いである。

(1) http://www.ndl.go.jp/jp/preservation/iflapac/index.htm

(2) https://www.ifla.org/globalvision/report

(3) https://www.ifla.org/pac

(4) 移行の背景等については、次の記事を参照：小林直子「転換期の IFLA／PAC―新たな方向性の模索」『ネットワーク資料保存』第 110 号, 2015 年 3 月。

（さとう　よりこ／国立国会図書館
・IFLA／PAC アジア地域センター）

＜参加報告＞
国立国会図書館主催第 29 回保存フォーラム『図書館建築と資料保存』

小林　彩

2018 年 12 月 21 日（金）国立国会図書館 東京本館 新館 3 階 大会議室にて、第 29 回保存フォーラムが行われた。今年のテーマは「図書館建築と資料保存」だ。

最初の講演「資料収蔵施設の建築と設備」を行った青木睦氏(国文学研究資料館准教授)は、国文学研究資料館で資料管理学を担当、主にアーカイブズの保存に携わっておられる。

講演は、自らが 2008 年の国文学研究資料館移転に関わった経験を下敷きとしていた。冒頭に、「資料保存に限らず、すべての物事は立ち上げる段階で、原材料の調達から廃棄までを見越した考え方（LCA　ライフサイクルアセスメント）をする必要がある」と話されたことが印象的だった。具体的な保存図書館の建築や運用の工夫、アイデアとしては、資料の劣化因子とそれを排除する方法や、保存箱やかご台車（棚替わりに使う、移動可能、高床式）などの有用なアイテム・設備の紹介など、どれも大変参考になるお話だった。

全体を通して青木氏は「結局は人が大事」と繰り返し仰っていた。資料収蔵施設の設計、建築、運用、それぞれの段階において、どんな工夫をすべきなのか、施設に関わる全ての職員が考え、行動することが大切で、そのために資料保存には職員の研修、教育が不可欠だというお話だった。保存に関する知識や技術が、すべての図書館にそのまま活かせるというわけではない。結局はその施設を最もよく知っている、現場で働く職員が、自ら最善の策を考えることが

肝心だということで、専門家からの助言も、そのまま鵜呑みにするのではなく、参考程度に留めればよいとのことだった。私も研修等に参加するだけでなく、勤務館の保存環境について考え、先の見通しを持っていかなければと考えさせられた。

続いて事例報告１件目の小島浩之氏（東京大学大学院経済学研究科講師）による「東京大学経済学部資料室における建築設計の考え方」では、「図書館には図書館独自の建築（保存論）が必要」という主張の元、同施設の間取りや動線、各々の部屋での資料保存上での留意点や、実際に収蔵庫にカビが発生した際の経験が紹介された。次の眞野節雄氏（東京都立中央図書館資料保全専門員）による「東京都立多摩図書館―施設からみる予防的資料保存対策」では、2017 年に開館した同施設について、具体的な資料保存上の工夫（温湿度モニター、照明、紫外線防止フィルム、塵芥粘着マットなど）や、災害等に備えて館に設置している「被災資料救済セット」が紹介された。最後の小澤恵美子氏（国立国会図書館資料保存課保存企画係長）による「国立国会図書館の３施設の概要―資料保存の観点から」では、大規模施設であるため、建物の断面図を用いた構造説明から始まり、防災対策、保存環境の管理が具体的に紹介された。

事例報告の３館は、それぞれ施設の規模や構造が異なるにもかかわらず、共通の認識が多くみられた。中でも重要なのは「断熱と防湿」で、各図書館が、建物の建築段階、またはそれ以降に断熱と防湿のための対策をとっており、それなしでは資料保存は始まらないといった感じを受けた。紙の資料にとって大敵である水、カビによる被害は断熱と防湿をしっかり行うことで最小限に防げるため、資料保存の要となる。施設に出入りする全ての人が資料保存の環境に大きな影響を与えるため、私自身、それを踏まえた行動をとらねばならないと再認識した。

閉会後、希望者を対象に、国立国会図書館東京本館新館の見学会が行われた。今回のテーマに即した見学内容のため、限られたエリアのみだったが、その圧倒的な規模感に気が遠くなるほどだった。中でも、自然光が深さ約 30ｍの地下８階まで届く、天窓のある空間「光庭」やガスボンベがずらっと立ち並ぶ眺めが壮観の「消火設備」、書庫内のステーションと資料の受渡しカウンターを蜘蛛の巣のように繋ぐ「書籍搬送設備」、見学者はもちろん、担当職員以外は立ち入ることのできない、木造りの「貴重書書庫」などは特に珍しく、興味深く感じた。

（こばやし　あや／東京都立中央図書館）

＜参加報告＞
第 104 回全国図書館大会
第 12 分科会　資料保存
「どうする!? 音声・映像資料の保存」

楯石もも子

2018 年 10 月 20 日（土）第 104 回全国図書館大会二日目の午後、国立オリンピック記念青少年センター（センター棟 401 号室）で開催された第 12 分科会では、「音声・映像資料の保存」をテーマに基調講演、事例報告、ワークショップが行われた。

【基調講演】「音声・映像資料保存の基礎知識」

児玉優子氏

（日本図書館協会資料保存委員会委員）

音声・映像資料にはレコード、映画フィルム、磁気テープ（カセットテープ、オープンリール、DAT、ビデオテープ）、光ディスク（CD、LD、DVD、BD）と様々な種類があり、新製品の登場の影で廃れてしまうメディアもある。基調講演では、各メディアの現物を提示しながら、その変遷や取扱いで注意すべきポイントをわかりやすく概説していただいた。次々と紹介される懐かしいメディアとそれにまつわるエピソードが面白く、楽しく拝聴した。

音声・映像資料は文字では伝えきれない音声・色・形・動きを記録再生できるという利点がある一方で、紙資料に比べて寿命が短く、技術の旧式化によって再生不可となる可能性もある。劣化や破損を防いで永く後世に残すためには、各メディアの特性を理解した上で取扱い方法や保存環境に留意し、再生機器のメンテナンス、記録形式の変換（デジタル化）等の対策を講じながら管理する必要があることを確認した。

【事例報告】「国立国会図書館における録音資料のデジタル化」

北川早苗氏（国立国会図書館利用者サービス部音楽映像資料課）

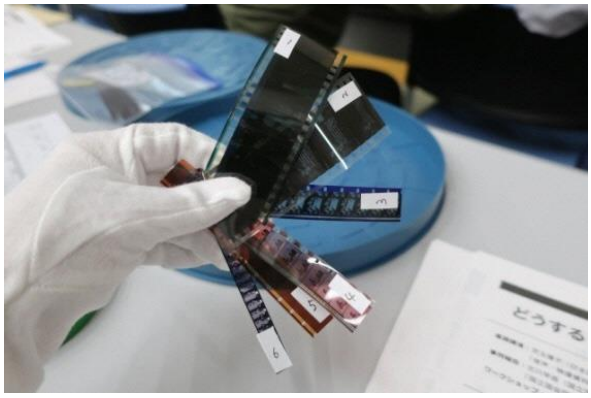
国立国会図書館が所蔵するアナログ形式の録音資料（約 30 万 5 千点）のデジタル化と公開について、カセットテープとソノシートの事例を中心にお話いただいた。資料状態調査を経て保存・デジタル化を計画・実施し、公開範囲については関係者協議会を設けて検討を重ねた上で国立国会図書館館内に限定したことなど、具体的なタイムスケジュールと合わせてデジタル

化における業務の流れをイメージすることができた。また、原資料の音を忠実に再現するためノイズ処理は最低限にとどめたこと、音源だけではなくカセットテープ本体やソノシートの盤面、付属する歌詞カード等の画像デジタル化を行っていることも印象に残った。

【ワークショップ】「映画フィルムの検査と保全－16 ミリフィルムを中心に」

鈴木伸和氏（（株）東京光音）

参加者が2人一組になって行ったワークショップでは、実際の映画フィルムのリールや断片をサンプルに用いて検査（インスペクション）と保全（コンサベーション）の基礎を学んだ。リールの直径から再生時間を割り出す計算や、ごみ袋を利用したリールの巻き直し、匂いから状態を判断するなど、今回演習した特別な道具がなくても可能な検査・保全の方法は、すぐにでも実践できそうな内容で参考になった。



分科会全体を通して、音声・映像資料の特性を学び、所蔵資料をどの様な形で利用者に提供し残すべきかを所蔵館ごとに判断し、計画的な保存対策とスタッフ・利用者への取扱方法の周知が重要であることを実感した。

（たていし　ももこ・東京都江戸東京博物館）

第 104 回全国図書館大会第分科会

参加者アンケート結果（回収 53）

1. **所属する機関**

公共図書館・・・・・・・・・・・20（38%）
学校図書館・・・・・・・・・・・2（4%）
大学図書館・・・・・・・・・・9（17%）
専門図書館・・・・・・・・・・・4（8%）
その他の図書館・・・・・・・・・2（4%）
公文書館・資料館等・・・・・・・2（4%）
博物館・美術館・・・・・・・・・2（4%）
その他・・・・・・・・・・・・・5（9%）
未記入・・・・・・・・・・・・・6（11%）

2. **業務上参考にになったか**

大変参考になった・・・・・・・33（62%）
参考になった・・・・・・・・・17（32%）
どちらともいえない・・・・・・・・0(0%)
参考にならなかった・・・・・・・・0(0%)
未記入・・・・・・・・・・・・・3（6%）

3. **音声・映像資料の保存について取り組んでいるか**

特になし・・・・・・・・・・・33（62%）
取り組んでいる・・・・・・・・16（30%）
・ デジタル化（計画・検討・公開基準含む）
・ デジタル化以外の媒体変換
・ マイクロフィルムの定期的なまき直し
未記入・・・・・・・・・・・・・4（8%）

4. **今後取り上げてほしい内容**

・ 視聴覚資料の保存・修理の具体的作業
・ 再生機器
・ 視聴覚資料関連（機器を含む）
・ デジタル化および活用方法
・ 紙資料の保存・修理
・ カビ対策

5. **現在困っていること**

・ 映像資料の著作権処理
・ オリジナルの保存環境
・ 映像資料の劣化対策に理解が得られない
・ 保存環境の適正化
・ 再生機器が製造中止となってしまった媒体の保存

資料保存委員会の動き

2018 年 5 月定例会

日時：2018 年 5 月 16 日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：7 名

内容：

報告事項（「ネットワーク資料保存」：118 号近日アップの予定・119 号候補について／見学会：東京都立多摩図書館募集等について・その他候補検討／研修、セミナー：候補検討／災害対策委員会報告）

協議事項（図書館大会：実行委員会予定／分科会会場について／「図書館雑誌」原稿について／構成と登壇者確認／ワークショップ検討）

2018 年 6 月定例会

日時：2018 年 6 月 20 日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：9 名（オブザーバー含む）

内容：

報告事項（「ネットワーク資料保存」:118 号 5/29 アップ・119 号ブックレビューと投稿について／見学会：東京都立多摩図書館募集状況・その他候補について／研修・セミナー：候補の交渉結果について／その他：大阪府北部地震の資料被害と救済の動きについて／富岡町図書館再オープンと準備期間の状況について）

協議事項（図書館大会：スケジュールと担当の決定）

2018 年 7 月 9 日

東京都立多摩図書館見学

参加者 19 名

2018 年 7 月定例会

日時：2018 年 7 月 18 日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：7 名（その他 1 名見学者あり）

内容：

報告事項（「ネットワーク資料保存」：119 号記事候補確認／見学会：東京都立多摩図書館の感想・今後の候補について／研修、セミナー：修理講座・富岡町図書館打診／その他：JHK 共催シンポジウムの日程決定・西日本豪雨の資料被災状況／国立国会図書館研修会について）

協議事項（図書館大会：「図書館雑誌」原稿提出／第 4 回実行委員会出席とスケジュール確認）

2018 年 8 月定例会

日時：2018 年 8 月 22 日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：9 名（オブザーバー含む、ほか見学者 1 名）

内容：

報告事項（「ネットワーク資料保存」：119 号掲載予定・原稿募集／見学会：候補および東京文化財研究所見学の内容と日程候補、その他の交渉状況／研修、セミナー：修理講座、富岡町図書館再開までの歩みの広報について／その他：西日本豪雨被災図書館視察報告・JHK 共催シンポについて）

協議事項（図書館大会：第 3 回実行委員会報告／担当決定／準備状況、スケジュール確認）

2018 年 9 月定例会

日時：2018 年 9 月 26 日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：8 名（オブザーバー含む、ほか見学者 1 名）

内容：

報告事項（ネットワーク資料保存：119 号進捗状況および追加候補について／見学会：交渉状況について／研修、セミナー：富岡町図書館再開までの歩みの詳細決定（災害対策委員会との共催）、修理講座日程候補、JHK 共催シンポ詳細と役割分担について／災害対策委員会報告）

協議事項（図書館大会：申込み状況および当日受付について／前日準備打ち合わせ／当日スケジュール／分科会運営の注意点／大会全体の概要について）

2018 年 10 月 9 日

第 12 回資料保存シンポジウム

「護り継ぐ文化資料

―平成から次の時代へ―」（JHK と共催）

一橋大学一橋講堂中会議場学術総合センター

参加者 158 名

2018 年 10 月 20 日

第 104 回全国図書館大会第 12 分科会

「どうする!? 音声・映像資料の保存」

オリンピック青少年センター

参加者 77 名

2018 年 11 月定例会

日時：2018 年 11 月 7 日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：8 名（オブザーバー含む、ほか見学者 1 名）

内容：

報告事項（ネットワーク資料保存：119 号進捗状況／見学会：東京文化財研究所見学詳細決定、その他進捗状況について／研修、セミナー：富岡町図書館再開までの歩みの役割分担ほか）、修理講座日程・広報決定／JHK シンポ報告／災害対策委員会報告／NDL 保存フォーラムについて）

協議事項（図書館大会：104 回反省／105 回テーマ募集）

2018 年 11 月 12 日

資料保存セミナー「東日本大震災と原発事故から再開館までの歩み～全町避難の町・富岡町の図書館～」講師：星紀子氏

（災害対策委員会との共催）

参加者 24 名

2018 年 12 月定例会

日時：2018 年 12 月 12 日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：8 名（オブザーバー含む）

内容：

報告事項（ネットワーク資料保存：119 号進捗状況およびその他の候補原稿の見込みについて／見学会：東京文化財研究所見学、参加者・役割分担確認／研修、セミナー：富岡町図書館再開までの歩みの反省とネットワーク資料保存の原稿について、修理講座広報決定、災害対策委員会との共催承認「災害と図書館」、JHK との共催セミナー企画あり、要検討）

協議事項（図書館大会：スケジュール確認／テーマ候補検討）

2018 年 12 月 17 日

東京文化財研究所見学

参加者 10 名

2019 年 1 月定例会

日時：2019 年 1 月 16 日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：9 名（オブザーバー含む）

内容：

報告事項（ネットワーク資料保存：119 号進捗状況およびその他の候補原稿の見込みについて／見学会：東京文化財研究所の感想とネットワーク資料保存の原稿について／研修、セミナー：修理講座詳細は 2 月例会で最終確認、その他の候補について）

協議事項（図書館大会：テーマ検討／登壇者候補検討／スケジュールと 2 月例会へ向けての課題確認）

その他（委員の担当変更について）

ネットワーク資料保存　第 119 号　2019 年 2 月

編集・発行：日本図書館協会　資料保存委員会

〒104-0033　東京都中央区新川 1-11-14

電話 03-3523-0816　FAX03-3523-0841

URL http://www.jla.or.jp/committees/hozon/tabid/96/Default.aspx

---